

# 福祉系対人援助職養成の現場から

63

## 西川 友理

### 外国ルーツの人と関わる機会が 増えてきた！

先日所用があり、15年ぶりくらいに週末の道頓堀に行ったところ、あまりの人の多さ、特に外国人観光客の多さに驚きました。場所によっては、日本語はほとんど聞こえず、様々な国の言葉が飛び交います。若い頃のように大阪の繁華街で遊ぶという事も長らくなかったので、完全に人波に飲まれ、翻弄され、とりあえず用事を済ませて、その場からはじき出されるように地下鉄の駅に入りました。ううむ、10年ひと昔ってこういうことか、なるほど…と感じ入りました。

2024年末で日本の人口の約3%が在留外国人であるという統計が出ています。コロナ禍を経て、海外からの観光客の数も、外国人労働者の数も、過去最高とのこと。年々、海外ルーツの人たちが日常生活に増加しています。ちょっと都会のコンビニエンスストアやファーストフー

ドのカウンターでは、半分くらいの確立で外国ルーツの店員さんに出会います。

そして私自身も、少し前から、海外ルーツの人たちに授業を教えることが増えてきました。福祉の現場、特に介護現場では外国籍の人も多く、現場研修を担当すると何名か日本語に不慣れな外国ルーツの人がいることは今や当たり前の状況になりつつあります。もちろん、これまでも、外国ルーツの学生は一定数いましたが、在日コリアンの2世、3世の方など、幼少期を日本で暮らしてきた人たちの割合が高かったのです。最近では、来日して数年という外国ルーツの留学生の割合が増えてきました。

### 留学生に

#### 日本のこども家庭福祉を教える

少し前から、留学生のみのクラスで、「こども家庭福祉」という科目を教えています。実はそのクラスの学生達の主たる専門となる科目ではないので、正直あ

まり興味はないという学生が多い様子です。しかし、それでも教養科目として卒業に必要なだからとこの科目を履修している学生さんに対して、さてどんな学びが提供できるかな……と頭を悩ませます。

いずれ大人になるのだから、いや、すでに大人も多いのだから、社会を生きる大人として知っておいてほしい子どもに関することを伝えます。さらには日本で働く可能性が高いなら、この国の子どもと関わる者のひとりとして、知っておいてほしい日本の現状を伝えます。またもしかしたらいずれ父や母になる者として、最低限理解しておいてほしいことを伝えます。

授業構成の工夫として、いろんな国の学生がいるので、お互いの国の子どもたちの現状について紹介するコーナーをつくりました。これが思ったよりも意外な知識を得られる、大変有意義な時間になっています。

今回は「対人援助職養成の現場」ではないけれど、ちょっと寄り道して、この学生達とのやり取りを紹介したいと思います。

## ネグレクト、って何？

児童虐待について説明していた時のことです。日本の児童虐待は法的に身体的虐待、心理的虐待、ネグレクト（養育拒否）、性的虐待という4種類があって……と説明していると、学生から質問がありました。

「先生、ネグレクトって何ですか。」

「子どもに対して、するべきお世話をしないってことです。例えば食事を用意しない、洗濯をしない、家に放置して閉じ込めておく、というような……」

と説明します、が、皆キョトンとしています。

「え、どうして？だって、誰かいるでしょ、家の中に。誰かが世話をするでしょ？」  
どうもピンと来ていない様子。

「いや、ほら、例えば母と子どもの2人暮らしで、親が子どもを家に置いたまま外出して……」

「ええと……私の国では、子どもがいるのに大人と2人暮らしとか、ないです。」

「ない？」

「ないです。あるかもしれないけど、少ない。ふつう、誰かいるでしょ。誰かがお世話をする。」

と答えた学生はネパール人の学生。その隣でバングラデシュ人やカンボジア人の学生もウンウンと頷いています。

基本的に祖父母はもちろん、おじやおば等、同じ家で、大人数で暮らすのが普通だから、なんとなく手が空いてて、暇がある誰かが、子どもが泣いていたら、家族なんだからそりゃあ世話をするのが当たり前、とのことでした。

「日本ではそんなことがあるんですか！」と驚いています。じゃあ皆の国には虐待がない？と聞くと、彼らいわく、

「ありますよ、Child Abuse ですよ。ええと、学校に行かせない！道でお花やお菓子を売る仕事をさせる。」

「私の国もそれがありません！問題になっています！」

「田舎の方や、貧しい家はそういう問題、けっこうある！！」

この地域の学生たちにとって児童虐待といわれて真っ先にイメージするのは、児童労働であるようでした。

「逆に日本ではあまり聞きませんねえ…あ、高校生くらいになったら、アルバイトしたお金を家計に回さざるを得ない、というのは時々あります。」

「それ、私の国ではもっと小さい頃からある問題ですね。」

とのこと。

授業後、調べてみると、ネパールの平均世帯人数は2021年で4.37人。日本は同年、2.37人でとのことでした。なるほど、それでは「家の中にだれかがいる」というのが当たり前というのも頷けます。

### 文化背景の違いから知る様々なこと

同じクラスで、社会的養護について説明していた時のことです。

それぞれの国では、親がいない、あるいは親と一緒に暮らせない子どもは、どこで生活するのかという話をしていた時に、多くの国の学生は「親戚と一緒に暮らす」「それが難しい場合は公共の施設で生活する」と答えていました。

その時、ミャンマーの学生が少し考えて言いました。

「今はおおよけの施設が多いけれど…ほんのちょっと前までは、一番多いのは

お寺でした。」

「お寺?!」

「はい、そういう子どもとか、困っている人とかを助けるのは、ミャンマーではお寺でした。」

「へえー!!」

これには他の国の学生たちも驚いていました。

ウズベキスタン人の学生は、日本の少子高齢化について、しょっちゅう私に議論を持ち掛けます。

「日本人はね、もっと家族を大事にしないと!!離婚の数、すごく多いよ!子どもの生まれる数もすごく少ない!これは、大問題ですよ!!」

「お金持ちで子どもがいないより、ちょっと貧乏でも、子どもが多い方がいい!そんな価値観を持たないといけませんよね!!」

調べたところ、ウズベキスタンの合計特殊出生率は2023年で3.5とのことでした。うーん、そんな国から見たら合計特殊出生率1.20の日本には、言いたいことが沢山あるのでしょうか。

### 日本の現状から、 出身国を顧みる学生たち

その一方、ほんの少し前の日本で見られた光景が、授業中に展開されることがあります。

各国の子どもの状況について、地域格差があることを話し合っていた時のこと

です。

各国の地図を出して、その国の学生を指名し、自分の知っている子どもの状況について解説をしてもらっていました。

「北の方は田舎で、凸凹道だから、障害がある子どもが学校に通うことが難しいです」

「親は都会の方に出稼ぎに来ていて、家族や親戚が子育てをしています」

等々、皆の発表に耳を傾けていた時、

「今は、男の子も女の子も、勉強したい子は勉強できる。男女差別はないです。」  
といった男子学生に対して、その国の女の子たちが、

「は?!あるよ!!!」

と叫びました。

「ないよ!むかーしはありましたけど、今は聞いたことないよ。」

と答える男子学生に対して、

「あるよ!聞いたことないのは、あなたが男だからだよ!先生、女の子の方が勉強とか進学とかしないでもいいとか、するなって言われることが多いです。」

と答える女子学生。これには同じ教室にいたいくつかの国の女子たちも同意して

「私の国もそうです!うちのお父さんとお母さんは違ったからこうして日本に来れたけど…」

「都会はそんなことないけど、田舎はまだそうみたいです。」

男子学生の中には、それは当然だよ、とでもいいかげん顔をした者も、戸惑う者もいます。特にその時に発表していた学生は、胸に手を当てながら、

「先生、私は、皆に聞くまでそんなこと今もあるなんて知らなかった…」

とっています。

「日本でも、まだ地域によっては、そして家の考え方によっては、そういうことがあります。女の子は勉強する必要がない、進学するなんてもったいない、と言う人も一部にいるようです。」

というと、皆考え込みます。

「どこの国でもあるんですか…」

とつぶやく学生。

ヤングケアラーについて、ネパール人の学生に伝えた時の反応も印象的でした。

「ヤングケアラーという言葉を知っていますか？」

と聞くと、全員が「知らない」と答えます。

「家族の介護その他の日常生活上の世話を、過度に行っているとされる子どもや若者のことでね…」

と説明をすると、

「そんなケア、家族が担うの当たり前です!」

「家族で仲良く助け合うのが大事です!子どもが手伝うのは、普通の事です。」

と口々に意見を出します。しかし様々な事例や統計を出すと、やがてだんだんと真剣に聞き始めます。

その日、授業後のミニッツペーパーには、

「私の国ではヤングケアラーという言葉はない、だけどケアによって遊ぶ時間や勉強の機会がこんなに奪われるのは問題

だと認識を改めた」

という回答が非常に多く見られました。

また、

「ネパールにはヤングケアラーという言葉はない。でも、ヤングケアラーは、ネパールの家のほとんどにいると思います。特に貧しい家には必ずいると思います。でも、それが当たり前になっています。問題として議論することから始めないといけないと思います。」

「普通のことのように見えても、実は大変な思いをしている人がいるかもしれません。そのことに気付きました。」

「友人の兄は妻を出産で亡くした。赤ちゃんを一人で世話できなかつた兄に代わり、友人がお世話を引き受けざるを得なかつた。彼女は学業を中断し、全ての時間とエネルギーを子供の世話を捧げた。彼女の愛情と献身は確かに赤ちゃんにとって有益でしたが、私は彼女の将来——夢や目標、個人的な欲求——について考えずにはいられなかつた。友人が実際にこの経験をしたことを知るまで、このような困難を私は本当に理解していませんでした。」

このような感想があふれていました。

まるで2020年前後、日本でヤングケアラーという言葉がやっと認識され始めたころの再現のようでした。

### 専門性を超えて、国籍を超えて

何年か前に、卒業を目前にしたある保育学生が、

「この保育の勉強、専門職教育じゃなくて、義務教育でやるべきだと思うわ。」と言いました。

「だって大人になったら多くの方が子どもを儲けるでしょう。たとえお父さんやお母さんにならなくても、社会人として子どもに対応できる大人ではありたいじゃない。ピアノや工作の技術までは要らないけど、例えばこども家庭福祉とか保育原理とか社会福祉とか…専門性や職業にかかわらず、どんな大人になっても絶対に必要な知識やと思うねん。」

いやいや、昨今の留学生に向けた授業の様子を見るに、専門性や職業どころか、国境までも飛び越えて、必要な知識のようですよ。

いつもいつも学生に教えてもらってばかりの私ですが、留学生対象の授業は特に毎週新鮮な驚きがあります。

この学生たちは、専門職にはならないかもしれませんが、お父さんやお母さんにはなるかもしれません。少なくとも、大人として、社会を作っていく人たちです。最初はつまらなそうにしていた学生も、話題によっては教室が静まり返るくらいに集中して話を聞いていたり、おかしいと思った事には活発な発言が見られたり、と、授業をされていてとても楽しいのです。

もう15年以上、この連載を続けていますが、こんな新しい経験、新しい学びを、まだ学生たちが教えてくれるのです。この仕事は本当に刺激的です。